

き残しておきたいと筆をとりました。あれから五十余年、あのような悲惨なことが再び起こらないように、平和が永く続くことを祈っております。

## 安東最後の悲劇

東京都 岩崎重夫

はじめに

身ごもっていた妻を伴って、万里の長城近くから安東に着いたのは、敗戦の年の九月末であった。しかし、すぐに朝鮮には渡れずに、安東で一年以上も滞留を余儀なくされた。

昭和二十二年十月末、残っていた全邦人の脱出的な引揚げが決まり、二十三日から三日間で、北海道から九州の出身地ごとに組を編成してジャンクに乗ることになった。その二日目の晩に中共軍による市内各所の爆破があり、二十五日乗船予定の大勢の人が苦難した。

『平和の礎』一巻に、「同じ船団中の一帆船に乗る」「積み残された三百五十人の遭難」の記事があるが、そのなかで一番の悲劇の記録がない。その悲劇の関係者としてこれを記録し後世の人に残したく書いた。

一 生い立ちから渡満、安東避難まで

私は、大正五年十一月一日、台湾の台中の霧社に生まれた。五歳のときに、一家六人は東京の芝区（現在港区）の三田に移り住んだ。慶応義塾商工部に入り商業学校に転じて卒業し、郵船会社に勤めながら中央大学の夜間部に通い法学科を卒業した。

父は、昭和初期の大不況で工場を失い、まもなく病死。私が十四歳の時だった。

あの二・二六事件のときには学年試験だったが、大学校舎の隣が西園寺公の屋敷だったので軍隊が駐屯していた。

昭和十六年五月、大連市に近い営口商工会に職を得て渡満、約一年半ほどして協和会営口市本部に移った。約二年間の実務は楽しく、新京の中央練成所にも入った。

ある日「特別工作要員として熱河省本部に転勤を命ずる」の電報で急ぎ承德に赴任した。本部の所在地は山奥の建昌街で、ランブの生活だった。

休暇をとり東京で結婚し、凌源街に駐在中の昭和十九年十月に長男が生まれた。

戦況が悪化してきた二十年五月に、牡丹江・石頭の部隊に応召された。その部隊が七月に南下して、安東・五龍脊の山野で幕舎生活をしているうちに終戦となった。

八月二十日過ぎに、「三十歳以上で家族が満州にいる者は帰郷を命ず」という達しがあり、中隊で三人が中隊長に呼ばれて除隊、兵服で雑のうをもらったただけだが、貯金通帳を渡されたので後で大変に助かった。

安東市街は至極平穏だった。協和会の市本部事務長の松川平八さんに初対面し事情を話し、その夜は同家に泊まった。松川さんの息子二人は大連中学の寄宿舎にいて、動きがとれないとのことだった。

旅装を、協和会服のズボンと地下足袋にした。途中で、郵便局で通帳の全額をおろし、列車に乗った。日

本人は私だけだったが、危険は感じなかった。のろのろ運行で、某小駅に長時間止まった。その駅横にあった日本人住宅三棟は、窓枠が外されるほどの荒らされようで、内部も丸見えだった。松川さんの言ったとおりだ。庭に残っていたトマトを口にした。

やっと奉天に着いたが、それから先に行く列車はない。駅前の鉄道局建物に入ると玄關脇に数人がたむろしていたので仲間入りする。ここなら状況を知るのに便利だ。

治安も段々と悪くなって、二日目の夜には、市内で大火事が起こった。

四日目に錦州行きが仕立てられると聞き、切符を買う。乗り込むと中国人で満員で、機関車に連結されている石炭車に上り伏せた。途中で洪水跡の濁水に腹を白くふくらませて浮いている豚を見た。

錦州駅に着き、駅員に承德方面行きを尋ねると「熱河地方の避難民が大勢着いて、学校に収容されている」と知らせてくれ、道順を教えてくれた。女学校と小学校が並んでいるが、小学校舎の方に凌源街の集団

がいた。

そこで妻を発見し驚いた。「どうしてここに！」と問うと、元氣のない妻は「忍が死にました。具合が悪く建昌街を出て凌源の病院に入れていて、そのままだ本人全員の避難退去で連れ出されて、無蓋貨車に乗せられ途中で雨にも遭い、容態が急に悪くなって五日前に死んだのです。初めに収容された女学校の校庭に埋めてあります」と言った。校庭の隅に小さな土饅頭があった。手を合わすが涙は出ない。隣には既に新しい大きな土饅頭ができていた。頭をさげた。戻って凌源街の人たちに礼を言って、教室の雑魚寝に加わった。雑炊の給食があった。

建昌街の人たちは、逆方向の山を越えて山海関近くの緩中に出たとのことで、連絡がとれない。例え連絡がとれたとしてもなにもならないのだが。

「さて、どうしよう？」妻は、着替えを少し持って出ただけで無一物。所持金もわずかで、私が郵便局でおろしてきた二百数十円が二人の全財産だ。給食も臨時的な処置である。他の人は、買い食いや自炊を考え

ている。妻の腹が少し目立ってきた。出征のときにその兆候があると告げられていたので、大切にしたい。

青龍県のグループが到着したようだが、二十数人がよれよれになって座り込んでいる。十数日間ずっと歩き続けて誠に惨めな姿である。

こうしてはいられない、局面打開しなければ共倒れになるかもしれない、急ぐべしと考えた。「そうだ、安東に行こう。路銀のあるうちに朝鮮を渡って、一日も早く日本に帰り着くのだ！」と決心し妻に話した。

友人の山田一夫君が、興業銀行錦州支店にいて新京の本店に移ったことを思い出し、社宅を捜して、風呂を使わせて欲しいと願ったが、幸いに空家の一軒を使わせてくれた。そこで妻は、髪を切り、かみそりで坊主頭になって私の軍衣を着て略帽をかぶった。

出発を前にして、一人の若者が同行を申し出た。脱走兵の坂谷権三郎君で、ソ連に抑留されるという部隊がまだ錦州にいるので、少しでも早く離れたいのだった。屈強な現役上等兵の連れは心強いことだった。

早めに列車に乗り込み座った。すぐに満員となっ

た。「あれは女だ」と中国人が、妻を指して言った。

立錐の余地なし。困ったことは、便所に行けないことだ。男二人は拾ってきた防疫用ゴム手袋で用を足したが、妻はそれができずに、顔全体に汗を流して我慢していた。後に、「あんなにつらいことはなかった。下着までびしょ濡れで」と話していた。

真っ暗な奉天駅に着いた。もみくちゃにされながら坂谷、妻、私の順で進むが、その時、近寄った大男が、私の雑のうの紐に手をかけた。黙って首を傾けて奪い取らせた。妻と離れたら危険だ。

改札口でない所から流れ出た。恐怖感が身を包む。

大通りを突っ切ってすぐに小路を曲がり、袋小路の大きな石炭殻入れ箱の陰に身を隠し、しばしまどろむ。明るくなった高窓から日本人の声がした。事情を話すと内に招じ入れられ、温かい飯を振る舞われた。この町会事務所に営口からの難民が収容されているとのことだった。そこに行き、その晩は廊下の隅に泊めてもらった。

翌朝駅に行き、北方から着いた列車が安東方面に行

くというので、切符を買って乗り込んだ。車内は独特の異臭がした。朝鮮人の集団帰国列車だ。「日本人は乗せない、降りろ」の怒声が投げつけられた。他の車両に移ったが同じこと。ホームに降りると怪しげな中国人が近寄ってきて、中の子供がすーっと私の腰にさげた手拭いを抜き取った。

ふと見ると最後尾の貨車に梯子が掛けられていた。走って登り、「お願いします、安東まで！」と懇願したが、「駄目だ、乗せない！」の声が返ってきた。もう帰る所がないのだ。そしてホームは危険がいっぱいなのだ。

するとその時、暗い奥ですくっと立ち上がった青年が、「乗せてやろうじゃないか。見受けたところ一人は身重のようだ。この人たちも同様に日本帝国主義の犠牲者である。どうだ、乗せよう！」と説いて見回した。静かになり、入口あたりの者が少しずつ動いた場所をあけてくれた。「ありがとうございます！」と礼を言った。青年は「私はキリスト教の信者です。多分、平壤で教会の仕事についているでしょうから、縁

があったら寄ってください」と言った。

列車はすぐに発車した。空は青く、吹き入る風はさわやかだった。

安東に着いた。手を振る者もいた。安東は九月の末で夕暮れどきは肌寒かった。

とりあえず駅前の大きなホテルに宿泊した。食堂も電灯を明るくして営業していた。しかし、地下広場には朝鮮から追い返された難民がむしろの上で寝ていて、発疹チフス患者も多いとのことだった。いろいろな事情を聞くうちに朝鮮に渡ることを断念した。

松川さんの家に行く。にぎやかだ。新京の神是俊さん一家四人も同居していた。どういうつてだったか、第五街七段（以前の四馬路七丁目）の加藤老夫婦の持ち家に入った。松川さんの家と近いところだった。

海保正夫省事務長宅に顔を出すようにと松川さんから言われたので訪れた。中央本部から来ていた崎山信義さんに事情を聞かれて、二百円を渡された。助かった。

妻は、向かいの中国人の家でたばこ巻きを手伝っ

た。私は、海保さんの古本屋の店番となった。だが、市政府日僑管理課から「日本人が集まる場所になるので不可」という通知があって店を閉じてしまった。

十二月に、肋膜炎になり水を抜く手術をした。翌年の一月末に次男が生まれた。二月初めに中共軍に逮捕された。五月になり、第五街公所の日僑管理員となった。

そして十月末、冬に向かい暗たんとしていたときに、残留全日本人の海上からの引揚げが具体化し、帆船による避難脱出となったが、悲惨極まりない結果となった。特に、三日目、二十五日に乗船したグループの人々が悲劇を被った。収拾にあたった人の中で中心的な存在であった松岡信男さんは、第五街に住み、隣組の第二班長だった。

## 二 埠頭の大混乱

十月二十四日夜半から行われた、中共軍の撤退に伴う安東市の中枢機関の爆破工作は、市政府、省政府、公安局、発電所、水道施設、その他各種工場などの重要建造物を爆砕し尽くした。翌朝の未明ごろまでに

は、市内に中共軍の一兵をも見受けることはできなくなっていた。

もちろん民主連盟員も彼らと行動を共にして、海路大連方面や対岸の北鮮へと撤退した。我々が引揚げのために、船賃として民主連盟に前納した約一千万円の行方については、ついに不明であった。民主連盟員のとった一連の行動は、二十五日に予定していた我々の行動を困難にしてしまい、全員の憤激を招いた。

未明ごろから各所で満人が暴民化して集合し、徘徊しており、とても危険な状態になっていた。埠頭に行く途中において、荷物を略奪された者も多数いた。

もちろん埠頭には、民主連盟員の姿は見えず、また一隻の船も見あたらずに、避難民一同は絶望的な状態になった。前夜の状況急変によって、当日は、引揚げ予定者以外の者、すなわち重病人、残留希望者、勞工、看護婦、技術者等の要員として残留を強制されていた人たちも集合し、その数は予想をはるかに上回り、約三千人前後になっていた。

全くの混乱状態で、特に悲惨だったのは、避難行動

でやむを得ずに連れ出された重病人で、埠頭への移動途中、あるいは埠頭で死んでしまった人たちである。

もちろん、これら重病の人にとって、死は時間の問題ではあったが、故山を一衣帯水に望んで虚しく異郷に眠ったことには、涙を禁じえない。

私は、この混乱を収拾するため積極的になり、各県の代表者の集合を求め、それぞれ必要な処置について協力するよう要請した。

各県代表の中には、米山藤作君、小田部繁実君、金崎達雄君及び海路引揚げの手段について意見の対立していた神崎丙午君等がいた。

私たちの努力の結果、帆船十隻、機械船一隻、計十一隻の確保ができた。船賃の交渉を始めたが、船主は「中共票は駄目、鮮銀券だけ受け取る」と主張した。

中共票の無効は分かるが、日銀券や満州国幣はまだ有効であると説明したが、当時の状況では我に不利であり、治安が悪く暴動が全市に拡大する恐れのあるときなので、一刻も早くこの埠頭から逃れようとの焦慮もあり、約二時間に及ぶ交渉の結果、船賃は北緯三十八

度線の北側潮浦まで一人当たり九百六十円を鮮銀券払い、ただし内二割は満州国幣を認めると決定、もし船賃に不足を生じた場合は、携行荷物で支払うという条件で契約した。

正午ごろから乗船を開始、各船とも船内、甲板上を問わず、文字通り立錐の余地もないほどに詰め込んだが、どうしても約三百五十人が乗船できなかった。これは主として宮崎県の人たちだった。代表者は第五街の金子秀雄君なので、私は新義州到着後直ちに責任を持つて手配をするということで承諾を得て、十一隻の船を対岸の新義州に向けて出航させた。

### 三 新義州での出来事

新義州に無事到着した。到着後、昨夜半にここに撤退していた連盟調査部の川瀬君と連絡がつき「即刻新義州保安隊から武装警備員を安東埠頭に派遣する。安東に残された約三百五十人は、その警備のもとに当夜は埠頭倉庫に宿泊し、翌朝、配船の手配をする」ということを決め、私もひと安心した。

こんなこともあった。二十五日の朝、埠頭に集合し

た約三千人が混乱状態にあったとき、中央区の民主連盟分会の岡崎周治君がひょっこり現れた。彼の出現は全く意外だった。「どうした？」と聞いたら、声をつまりらせて「いやあ、僕もあなた方と同様に取り残されたのです。私は皆さんに何と言って詫びてよいか……」と泣いていた。私は、常々彼の純情と率直を知っていたので、四面楚歌ともいうべき彼の心情を思いやり同情した。ところが彼の服装を見て「おやっ、連盟のやつだ」「殺してしまえ」と人々が集まってきて、人民裁判に発展しそうになった。だれしもが失望と憤激の交じった気持ちでいたので、たちまちにとり巻かれた。私は、これはいかんと思って、その場の険悪な事態を避けるべく「内地帰還は岡崎君一人を殺すことによって促進されるものではない。我々は、船の手配に全力を傾けるべきである」といった意味のことを叫んで、みんなの注意を彼からそらした。口では強く言っていたものの、岡崎君に暴力を加えることには躊躇していた連中は、私の叫びに応じて気持ちを落ち着けてきた。こうして彼は危害から免れた。そして私の乗

る船に潜り込ませ、須藤清一君に、彼の隠れていた荷物倉庫に食べ物を運ばせたが、彼も運命のいたずらに遭って死んでしまった。

二十六日の朝、新義州を出帆、二十七日に竜岩浦着。先発した帆船も無事に停泊しているのを見て安心した。同日、竜岩浦水上保安隊並びに税関の検査があった。そのとき、保安隊員と税関吏を乗せた警備船が、私たちの船の船尾に衝突して私たちの船は小破したが、幸いに船大工の経験者がいて、彼に応急修理を依頼し、同様に船員経験者に念のために点検を頼んだ。航行には支障なしということで安心した。

しかし、このことが後に直接ではないにしろ、遭難の一原因になろうとは思わなかった。

二十七日の午後から、各船は相次いで一路次の目的港に向かって出港した。

あの印象的な場面は、今になっても眼前に彷彿として現れる。特に出港して行く帆船の舷側に立ち上がって「松岡さーん、松岡さーん」「岩崎さーん、岩崎さーん」と、互いに声を限りに名前を呼びかけ手を振り

合っている光景は、悲壮なものだった。

私の乗船は、底の浅い帆船と違い干潮では動きがとれず、翌二十八日の朝、出港となった。遭難船「恵美須丸」についての説明を加えると、機械船で排水量は百トン、定員約三百五十人で、主として福岡県の人たち五百六十九人と荷物約千個を積載していた。

安東出港の翌二十六日に降ったみぞれの寒冷に懲りて各代表が協議し、病人全部と老幼婦女子の大部分を船倉内に収容し、甲板上は主として青壮年の男子としていた。この収容状態が、遭難時に老幼婦女子のほとんどを亡くす原因となった。

福岡県代表は小田部繁実君で、私も帰郷先が福岡県になっており、小田部君などの勧めもあり、他よりも速い船で一足早く到着して受け入れ準備をしなければならぬことからこの船に乗り込み、事実上中心になって動いていた。代表者は、仕事の都合で船長室にいた。

竜岩浦出帆後、多獅島沖では、折からの無風により、漂流中の一帆船から私たちの船に止まるよう発砲



合図があった。近づくとその船は、二十四日の夜半に安東を出て大連方面へ撤退の中共軍の保安司令部員が乗り込んでいる船だった。同司令部に関する日本人多数の顔もあった。多獅島港まで曳航することを求められ、ローブによって両方の船を連結した。ローブの長さはわずか二十メートルで、司令部関係の日本人は船首に、こちらは船尾に共に無言で向かい合った。過去一年間の彼らと私たちの関係は、今日を最後に分かれたようにするとき、いま待望の帰国途上にある人々の胸には、過去の反目も憎悪も消え去って感慨無量の様子だった。正午過ぎに多獅島の港までの曳航を終えた。

私は、船の終着を北緯三十八度北側の潮浦として契約したことを、北緯二十八度南側の白翎島または仁川に変更すること、到着後の諸準備、船内衛生状態の改善、そして五百六十九人分の運賃約五十七万円を集めるなど多忙で、代表者の人たちと共に船長室に集まった。

その後、午後二時ごろから、各船を順次追い越して

航行していた。船長の話によれば、到着までに全部追い越して、本船が一番初めに到着するとのこと、同はますます多忙を感じていた。

#### 四 激浪の真ん中へ

二十八日の夕刻から、本船は沿岸を離れてコースを一路白翎島に向かって沖に出た。そのころから海上は段々と強風になり波が立ち始め、夜半に至り、烈風と激浪により船の動揺が激しくなり、ついに竜岩浦で応急修理を施した船尾から浸水を始めた。水は船内最底の機関室に流れ込んで、機関が時々停止するようになった。

船足は段々と遅くなり、激しい風と波のために船の動揺は増すばかりで、全く憂慮すべき状態になった。

私は、浸水の報告を受けるや直ちに青壮年の人たちに排水作業の協力を求めた。約五十人による排水作業は夜を徹して行われ、船は浸水と動揺にあえぎながら航行を続けた。

二十九日、昨夜来の暴風と激浪は続き、そのためにほとんどの人が船酔いで半病人のようになっていた。

代表者たちも同様、私も胃の中のものをすべて吐き出してしまい、頭もあがらない有様だった。いつもながら元気な金崎、鹿毛両君は、病人の手当てや必要な指示を伝えるため、船長室と船倉等の間を走り回っていた。とにかく、船を一時島陰に入れて風浪を避け、浸水箇所を修理しようということで代表者と船長との間で意見が一致し、そのときに最も近い鎮南浦沖の椒島に向かって針路をとった。

午前九時半ごろ、椒島を隔たる五マイルの地点にある徳島という直径二百メートルぐらいの小さな島の近くまで来てやれやれと思った瞬間、突然船底の方でドーンという鈍い音響がした。続いてズズズと砂の上を滑る音と、ポキッという何かが折れるような音がして船は止まってしまった。このポキッという音は、スクリュウの折れる音だったことが後で分かった。

妙にシーンとした瞬間であった。

私たちは起き上がって互いに顔を見合わせた。金崎君が急いで船長室のドアを開けて外を見た。私たちも金崎君に続いて彼の肩越しに外をのぞいた。

甲板上にいた人たちは、打ち寄せる激浪の飛沫を浴びながら、震える手でしっかりと舷側につかまっているのが見えた。もちろん人々は事態の容易ではないことを知っていたが、だれも声を発することを恐れるように押し黙っていた。

## 五 船内の惨状

船は波頭の上に乗せられてスーッと持ち上げられ、次の瞬間にはまたスーッと地の底に引き込まれるように下がった。下がったと思うとドシンと船底を浅瀬にぶつけてしまう。そんな状態を繰り返しているうちにポキッと大きな音と共に船は真ん中から前後二つに折れてしまった。

誰かが「心配するな、落ち着け！」と頓狂な声で叫んでいたが、その声に弾かれたようにみんなは「ワーッ！」と声をあげて、むちゃくちゃに動き回って収拾すべからざる混乱を巻き起こした。

逸早く元気な青年が四、五人裸になってマストに登り始めた。マストの下にいた者が女の人の腰巻きをむりやりはがして、マストに登っている青年たちに渡し

た。青年たちは、それをマストの頂上にしっかりと結び付けたので、赤い信号旗は折からの強風にはたはたと翻っていた。

この行為には理由があった。というのは、はるか彼方に漁労に出ていたと思われる船が一隻見えていたのだ。みんなは「おい、おい」と叫び救助を求めたが、しかしその願いの声は広い海面では届くこともなく、強風にかき消されていた。それでも一同は必死に願いを込めて叫んでいた。

真ん中から折れた船体は、急に安定を失って押し寄せる激浪に大きく傾いてしまった。波は甲板を掃くように流れて、訳の分からない叫び声をあげて動き回っていた人たちを、軽く波頭の上に乗せたまま一挙に五十メートルほどの彼方に運び出してしまった。

船が激浪から浮かび上がると、船倉内になだれ込んだ海水は、数百の遺体を押し出してきた。ちょうど溶岩が火山の噴火口から吹き上げられているようだった。私は、高い船長室からこの凄惨な光景を見ていたが、耐えられなくなって顔をそむけてしまった。

次の瞬間には、押し寄せた激浪の圧力と打撃力によって船首近くにいた約百四、五十人を残して、船はすべてばらばらに解体されてしまい、今まで甲板やブリッジに残っていた者は、全員激浪の中に投げ込まれてしまった。

このように書けば、いかにも長い時間の出来事のように思われるが、実際は座礁から船体の分解まで、わずかに三分ほどの出来事で「アッ!」という間にすべてが終わってしまったのだ。

私は、海中に投げ出される前に既に船長室からブリッジに出ていて、人々の混乱にもまかれていた。阿鼻叫喚の中で「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」という念仏の声を聞いた。ひょいとその声のする方を見ると、米山藤作君のお父さんで、有名な書家、朴堂老人であった。傾いた舷側につかまり、ちょうど井戸を上からのぞきこむようなところで震えていた。また、私が海中に投げ出される直前、いつの間にか私のそばに、金子一二君の奥さんとその姉の坂本キクヨさんが寄り添っていて、金子さんが姉キクヨさんの胸に取りすがっ

て「姉さん、汽車で帰ればよかったね」と言うのを耳にして、私は申し訳なかったと心の中でつぶやいた。私が金子君に海路による帰国を勧めたからである。

漁労中の船が、私たちの遭難に気付いて烈風に帆を膨らませて近づいてきた。その速度は追い風にのって相当速かったであろうが、私たちの気持ちからは随分と時間がかかっていたような気がした。

船体の破片と共に海中に投げ出された人たちの多くは、その瞬間、既に生死を決せられていた。それは海中に投げ出された瞬間に、浮流物をつかめたかどうかという偶然的なことに左右されたのである。事実、多くの不幸な人は、わずかの時間自分の体力をふりしほつて激浪に対抗したが、やがて疲れ果ててしまい激浪にのまれてしまったようだ。

私は、ブリッジから海中に投げ出された瞬間、長さ約五メートル、幅約二メートルの肋骨のついた舷側の破片につかまっていた。その破片には約三、四十人が取りすがつていて、その人たちは絶えず自分を安全な状態におくため、破片の上にあがろうあがろうとする

ので、破片は均衡を失って回転してしまふし、取りすがっている人はその回転につれて海中をくぐる有様であった。後で考えれば、この動作はいたずらに体力を消耗するだけの無駄なことであったが、皆理性を失っており、その無駄な動作にだれも注意をしなかった。

五回転もすると、体力の無い人は激浪に押されて破片から手を放してしまい、波の中に消えていった。また、残った人でも泳ぎに自信のある人は、この状態から逃れるために他の浮流物へ移動を試みたが、激浪の中で体力を消耗してしまつて、ほとんどの人が沈んでしまった。私も破片の回転につれて海中をくぐる苦しさには耐えかねていたが、泳ぎが下手なので我慢していた。海水にむせびながら必死になつてしがみ付いていたが、破片の回転が止まつて上にやつとはいあがつたところ、そこにはもう五人しかいなかった。

激浪の中に投げ出された数百人は既にほとんどが海中に没し、今は数十人に減つていて、広い海面のあちらに一人、こちらに二人と浮流物に取りすがっているのが見えるだけだった。

近づいてきた漁船の救助目標が、まず約百五十人を乗せたまま浮流している船首に向けられたが、この船首の人たちを救助することは容易でなく、漁船が船首に近づく距離を誤れば激浪に押されて衝突し、船首が壊されるおそれがあり、遠くから船首にロープを投げるだけであった。人の力での投げ方には限度があり、しばらくはこの無駄な方法を繰り返すだけだった。

私のつかまっていた舷側破片は遭難位置から流されて、既に約千メートル以上も離れていた。五人のうち二人は疲労のため眠気を催しており、言葉をかけていたのにむなしくも激浪にまき込まれてしまった。私も刻々と増してくる疲労と、段々と失われてゆく体温に歯をガタガタいわせながら、このままでは当然二人と同じ運命となるだろうと思った。家族もこの事態に抗して生きているとは考えられない、かわいそうなことをした。苦しんだことだろう。私の死ももうすぐだろう。いかに私が生を欲したとしても体力がどれほど持つか分からない。助かるかもしれないが死ぬかもしれない。家族もいないのに生きていても何になる。押し

寄せる激浪に全身を洗われながら次々と連想しつつ、救助の漁船から船首に向かってロープを投げる作業を人ごとのように眺めていた。

船首に残った人たちを助ける方法は失敗し、救助は漂流している人々に目標を変えた。船は私たちの方に段々と近づいてきた。数本のロープが人々に投げられた。浮流物上にあった体を躍らせてこれに飛びつき、船に引き上げられるのが見えたが、ロープをつかみ損ねて、いたずらに激浪中に身を投げ出して、元のところに戻る気力もなく、波にのまれてしまった人もいた。

私は、救助の漁船が通過するとき投げられたロープを目掛けて夢中で飛びついた。ロープにしがみついて船に引き上げられ、「助かった!」と思い興奮して立ち上がろうとしたが、それっきり意識を失ってしまった。

#### 六 船首に残された人々の惨状

日が全く沈んだころ、私らを助けた漁船は鎮南浦に着いた。既に意識は戻っていた。

私らと漁船の人たちによって遭難の状況が伝えられ、水上保安隊から警備船と漁船数隻が出動したのは夜の八時ごろだった。私らは、救助船を見送った後に迎えの日本人会の人たちに助けられて、日本人会事務所に向かった。

漁船が救助を断念して去ったあと、船首に残された約百五十人は、絶望のどん底に陥ってしまったそうである。

その後、自然の猛威によく抗して、何人かは激浪にさらわれたが、大部分の者は間断なく船首を襲う大波に耐えていた。午後四時ごろ干潮で激浪は去り、船首から徳島まで約六キロメートルの間は干上がって地続きとなったが、その間には三カ所の急潮流の瀬があり、どうしてもその瀬を渡らなければ徳島に上がれない。

潮が引いたとき、徳島に渡るかどうかについて意見が分かれ、渡るという人は「漁船によって遭難が報ぜられても、次の満潮時までに救助船が来るかどうか、もしも満潮時までに来なければ、この疲労した体で再

びあの激浪に耐えることはできない。例え三つの瀬があっても徳島に向かうべきだ」と主張する。渡るべきではないと言う人たちは「我らの遭難が発見されている以上は必ず、しかも早急に救助船が来ることを期待できる。この極度に疲労した体で三カ所の急潮流を渡るのは、いたずらに死を急ぐものだ」と言って譲らない。結局、それぞれの判断によって約三十人が残留し、約百二十人が徳島までの避難上陸を始めたが、既に満潮時にさしかかっていた。

第一、第二の瀬はやつと足の届く深さで幅は約五十メートル。この二つの急潮流を渡ったときには約三十人を亡くしてしまった。第三の瀬は最も潮流が激しく、しかも足が届かない深さで、第一、第二の瀬で体力を消耗しきった人たちは急潮に押し流されてしまい、必死の努力で渡った人の中でも、波打ち際で足を掬われて、岩で頭を打ち割ったり押し流されたりで、徳島上陸は約半分の五十六人だった。更に、上陸後に疲労、寒冷、負傷などで死亡した者が三人あって、五十三人が救出された。徳島では洞穴を発見して、その

中で文字どおり折り重なって、体温を温存しながら夜を明かしたそうだ。

一方、船首に残留した約三十人については、徳島に上陸した者の言によると、夕刻から船首上で焚き火をしていたが、午後八時ごろの満潮で船首もろとも波に押し流されたらしく、翌朝にはすっかり見えなくなっていたとのことであった。

出動した救助の数隻は、暗夜のため搜索が意の如くにならずに、何らうるところなく引き返してきた。翌三十日の早朝、更に救助船を増やして出動したが、その中の一隻が遭難現場の砂地で、恵美須丸のエンジンが残っているのを発見しただけだった。

海上搜索は三十一日をもって打ち切れ、以後は沿岸の水上並びに陸上保安隊で、生存者の搜索及び死体の収容をするようになったが、ついに生存者も一人の死体も発見することがなかった。誠に無念な限り。

徳島に避難して洞穴内で夜を明かした五十三人は、三十日に新義州から沿岸づたいに漁労しながら鎮南浦に入港しようとした漁船によって発見され、三十一日

に鎮南浦に入港上陸した。悪夢のような三日間の後である。

#### 七 遭難後日談

恵美須丸からの救出者七十二人が、北朝鮮からの引揚げ日本人集団と一緒に帰国するため元山に集合した。そして十二月二十八日に、日本の引揚船「栄豊丸」に乗り込んだが、その船内で一人の青年から、「十月二十九日の遭難当日の午後六時ごろ、壊された船の破片に乗って沿岸沿いに流されていた二人が、新安州に向かって航行中の一帆船に救助された。二人のうちの一人は遭難によって三人の子供を失った婦人で、そのことにより日本に引き揚げる意思をなくし、北朝鮮に残留を決意した」というような話を聞いた。他の一人はもちろんその青年である。

#### 八 再建を決意して日本へ

恵美須丸はエンジンを備えた立派な機帆船で、それに乗れた人々は、帆船に乗せられた人たちに比べて大きな安心感があった。しかし、運命のいたずらというか、船が破滅してしまったのだ。

あの惨状を眺め、平然と他人ごとのように語ること  
はできない。四百九十五人の心情を察するとき、涙、  
滂沱たるを禁じ得ない。

米山藤作君一家、小田部繁実君一家、鹿毛正則君一  
家、金崎達雄君一家、神崎丙午君、須藤清一君も亡く  
なった。

「心頭を滅却すれば火もまた涼し」と言って平然  
と死についた快川和尚を尊敬はしても、やはりその子  
古日の死に、手をさすり足をさすりして泣き叫んだ山  
上憶良に、人間としての愛情を感じるのである」と松  
岡さんも言っていた。

かつての日本の植民地政策にあったのは、軍閥の銃  
剣、財閥の搾取、官僚の独善などによって他民族を抑  
圧し、誤った政治的、経済的優位を誇っていたが、そ  
の当然の帰着として一敗地にまみれ、その結果、罪な  
き多くの同胞の生命、財産を奪い窮乏のどん底に追い  
込んだ。帝国主義によってよしとしてなされた政策  
が、結果的には他民族への抑圧となり、その行為は、  
壁に投げつけたゴムまりの如くに、民族的な反感とな

って海外同胞にはね返ってきた。

しかしながら一時的には、暴風のような混乱期があ  
っても謙虚な心を持って中国民衆との融和の上に生活  
再建に努力するならば、それはかつて帝国主義日本に  
よってじゅうりんされた中国民衆に対する罪の償いだ  
けでなく、ひいては民主再建を歩む祖国日本にも貢献  
するところ少くない。

だから、祖国日本の土を踏むまでは我慢して、団結  
と友愛の力によってこれ以上の犠牲者を出すまい、そ  
れが恵美須丸で遭難した人々への供養でもあると決心  
し、それからの困難の多い苦しい避難行に耐えて祖国  
にたどり着いた。

四百九十五人の人々が、故山を指呼の間にして万斛  
の涙をのんで海底深く眠りについた悲惨な事件は、  
「全海外引揚げ史」においても特筆されるべき大惨事  
の一つであろう。

あとがき

昭和四十一年に、平和の船（ブリアムーリエ号）で  
慰霊の旅に出掛けた際、鎮南浦沖にて同行の僧侶とお



経を唱えた。また、平成十年には平壤を訪問し、キリスト教会巡りをして、奉天から安東に行くときの恩人を捜すも会えなかった。錦州でも長男を埋葬した女学校跡に参って小石を持って帰った。慰霊の旅はまだまだ続いている。

## 満州国の崩壊と通化事件

東京都 鎌田昌夫

### 一 父の待つ満州へ

昭和三年八月二十日東京で呱呱の声を上げた私は、昭和十年四月東京の小学校に入学したが、間もなく父の赴任先の満州に行くことになった。父は農商務省から農林省、内閣資源局と移籍、更に日本の大陸政策に呼応して関東軍特務部の軍属として渡満していた。

母と私、そして二つ下の妹の三人で、下関から関釜連絡船「扶桑丸」で海を渡り、釜山で特急列車に乗り継ぎ、着いたところは新京であった。初めて異国の大

地に降り立った私たちは、満人の服装、言葉、仕草に目を見張ったばかりでなく、満人特有のにおいに外国にきたという思いをいやが上にも感じたのだった。迎えに来た父と馬車で陸軍官舎に向かったが、途中の広い道路と赤レンガの建物が珍しく、子供心にも大陸にきたということを身近に印象づけたのだった。

### 二 満州での生活

父は、関東軍司令部の特務部で移民の仕事を行っていた。司令部の外観は日本の城を思わせる巨大な建物で、大満州に君臨する無敵関東軍の威容を誇るに足るものであった。

私は付属地にある西広場小学校に転校の手続きをとって通学することになった。新京は満州国の首都だけあって、街路は広く整然と良く整備されていたので、町へ出掛けるときは気持ち良く、気分もおおらかになった。

その後、十二年八月、父が満州国の奉天省事務官に転出したので奉天に移住することになった。渾河河畔の砂山に近い郊外の閑静な弥生町に居を定めた。住宅